日本における祖父母との接触が子どもの教育達成におよぼす影響

石橋挙（専修大学大学院）

1. 目的

本研究の目的は，近年階層研究で議論がなされている祖父母階層の子どもの地位達成への影響と，それが祖父母と孫とのかかわりによるものかをあきらかにすることである．Mare（2011）が，親を超える祖父母効果を指摘して以降，各国の研究者が三世代間階層研究をおこなってきた．日本でも，荒牧（2012，2013，2019）が祖父母効果をあきらかにしている．こうした三世代間階層研究において，祖父母効果が親を超えて子どもに影響をおよぼすときに，議論されているメカニズムとして接触仮説がある．Bengtson（2001）は，近年の長寿化によって，家族内における祖父母の重要性が増し，祖父母は，自分の資源を子どもとのかかわりによる社会化を通じて受け渡す可能性があることを指摘している．この議論にかかわる研究として，中国の地方を対象とし，高学歴祖父母と子どもの同居が子どもの教育達成に正の影響を及ぼすことを明かにしたZeng and Xie（2014）や，オランダを対象とし，祖父の時間，距離的な接触が子どもの地位達成に正の影響を及ぼすことをあきらかにしたKnigge（2016）がある．そこで，本研究では，世界的にもトップクラスの長寿国である日本社会を対象として三世代間階層移動における接触仮説を検証する．その際，祖父母と子どもが生きた同じ時間を時間的接触とし，祖父母と子どもが同居していた時間を直接的接触として，それぞれ検証する．

2. データと方法

使用するデータは，2015年に実施されたSSM調査である．このデータをもちいる理由としては，祖父母と子どもの時間的接触だけでなく，祖父母と子どもの同居年数による直接的接触をも分析できるからである．分析の対象者は，子どもの年齢が22歳以上のケースである．また，系譜や子どもの性別によって効果がことなる可能性があるため，調査対象者の性別によって系譜をわけ，子どもの性別によっても分析サンプルをわける．サンプルサイズは，父方孫息子が1,872，父方孫娘が1,713，母方孫息子が2,339，母方孫娘が2,189である．従属変数には，子どもの学歴をダミー変数化（短大大卒以上を1，それ以外を0）したものをもちいる．独立変数には，祖父学歴ダミー（後期中等教育以上を1，義務教育を0），祖母学歴ダミー（同左），子どもが高等教育に進むまでのあいだに祖父，祖母が生存していた年数（0～18年），祖父，祖母と同居していた年数（同左）をもちいる．統制変数には，父母の学歴（短大大卒以上を1，それ以外を0），父の職業，子どものきょうだい数と出生年である．さらに，祖父母学歴と生存年数の交互作用項，祖父母学歴と同居年数の交互作用項も投入する．

分析方法には，クラスタロバスト標準誤差をもちいた2項ロジットモデルをもちいる．また，欠測値がおおいため多重代入法をもちいる．時間的接触，直接的接触変数はそれぞれ別々に投入したモデルにて検証する．その際，学歴のみのモデル，交互作用項を投入しないモデルと投入したモデルをもちいる．

3. 分析結果

分析結果として，父方孫息子にて祖母学歴と直接的接触の負の効果があきらかとなった．父方孫娘にて祖父の学歴の正の効果，祖父学歴と時間的接触の交互作用の負の効果，直接的接触の負の効果があった．母方孫息子にて時間的接触効果の正の効果があった．母方孫娘にて祖父学歴の正の効果，祖母学歴と直接的接触の負の効果があった．母方祖父学歴の孫娘への影響は荒牧（2012）の知見と整合性があった．接触仮説については，日本でも祖父母と子どもの接触効果があったため支持された．しかし，接触による効果は，時間的接触の正の効果も観察されたものの，直接的接触の負の効果や，高学歴と接触年数の交互作用の負の効果が観察された．

謝辞

本データ使用にあたっては2015年SSM調査管理委員会の許可を得た．また，2017年2月27日版（バージョン070）のデータを用いた．

（キーワード：三世代間階層移動、祖父母、社会階層論）